

統合失調症闘病記における回復の語りのナラティブ教材への活用

小平朋江 *¹⁾ いたうたけひこ ²⁾

¹⁾ 聖隷クリストファー大学 ²⁾ 和光大学

【目的】入院中心医療から地域で当事者が生活する支援という精神看護学での理論と実践の変化がある。Barker は、Tidal Model で当事者にとって重要なのは、自分の「物語を取り戻し、生活を回復する」ことと述べた。当事者の物語は重要な課題であるが研究は進んでいない。闘病記は、病いの理解だけでなく当事者の生き方を学ぶことでの偏見低減効果や、より深い人間理解が得られ、講義だけでは不足しがちな教育的効果も期待できる。野中 (2011) は当事者の手記活動の重要性に言及しリカバリーのヒントが満載として、浦河べてるの家の「当事者研究」の実践には、語りをもたらず回復やリカバリーという点で注目した。<研究 1>では効果的なナラティブ教材の選択のために、小平・いたう (2012) の 217 冊の闘病記リストから複数の闘病記を伝記分析とテキストマイニングで分析し、当事者視点による回復の語りを可視化する。そして<研究 2>では、統合失調症の回復の語りに対する学生の受け止めとナラティブ教材の効果の特徴を明らかにする。

<研究 1> 【方法】効果的な教材活用のために、闘病記をテキストマイニングと伝記分析で分析し、べてるの家の「当事者研究」で資料収集を行い、現実感のある回復の姿を導き出す。テキストの量的分析には Text Mining Studio Ver. 4.2 を用いた。【結果・考察】『こころの病を生きる』(中央法規 2005) は当事者の佐野と精神科医師の三好の往復書簡で注目語分析の結果、「生きる」を話題にしていることが分かった。『レッツ！当事者研究 1・2』(コンボ 2009・2011) では「回復」に着目して原文参照すると、「回復してきて、幻覚妄想大会でグランプリを取ることができました」「回復するために発見したことを、他に悩んでいる人に伝えて助けてあげたい」などである。評判分析から「自分」「人」「幻聴さん」は好評語として評価され、ポジティブな姿勢の現れである。野中 (2012) は「治療して『病氣』自体をなくしてしまうことを意識」するのではなく、「こうしたあり方は『リカバリー (回復)』という言葉で議論され、注目される」と述べた。当事者研究は、病氣と上手につきあいながらの人生や生活の取り戻しをした回復の姿であると言える。『当事者が語る精神障害とのつきあい方：グッドラック！統合失調症と言おう』(明石書店 2013) では、5 人の当事者は自分と人間関係について述べている点が大きな共通点であった。著者毎の多様な使用単語から、病いを抱えながら自分の人生や生活を取り戻している回復の姿が現れた。本書は 1 冊で複数の個別性ある統合失調症を持つ人の回復の姿が分る優れた闘病記である。<研究 2> 【方法】「精神看護援助論 I」で、ナラティブ教材 (古川奈都子「心を病むってどういうこと?」) を活用し調査を実施する。質問項目 (教材に「関心を持つことができたか」「役に立ったか」「もっと知りたいか」への回答) と感想文をテキストマイニングで分析し、学生の受け止めや効果の特徴を明らかにする。第一著者所属大学倫理委員会の審査を得た (認証番号 14051)。【結果・考察】質問紙からは、学生の 84.0% が関心を持ち、86.6% が役立つと思い 76.5% がもっと知りたいというポジティブな回答が得られた。感想文より、学生は教材を通して当事者が回復を「生きる」姿を受けとめていることが分かった。

【全体的考察】闘病記をナラティブ教材として活用することは、学生が当事者の回復した姿のイメージを持ちやすくする教材として意義は大きいと考える。【学会発表】●日本看護学教育学会第 24 回学術集会 (2014 年 8 月 27 日)、●日本心理学会第 78 回大会 (2014 年 9 月 10 日)、●日本看護科学学会第 34 回学術集会 (2014 年 11 月 29 日)